

Kamiya, K. 1938. A systematic study of the Japanese Dytiscidae. *Journal of the Tokyo Nogyo Daigaku*, 5: 1-68, 7pls.  
 北野 忠, 2000. 静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, (15): 17-24.  
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 231pp., 文一総合出版.  
 中根猛彦, 1964. 日本の昆虫(48)げんごろう科(続き). 甲虫学小誌, (1-3): 1-12.

東京都環境局自然環境部編, 2014. レッドデータブック東京 2014 ~東京都の保護上重要な生物種(島しょ部)解説版~. 634 pp., 東京都環境局自然環境部.  
 吉富博之, 2014. 伊豆諸島の水生甲虫類. さやばねニューシリーズ, (16): 26-31.

(北野 忠 259-1292 平塚市北金目 4-1-1 東海大学教養学部)



岩田隆太郎, 2015. 木質昆虫学序説 (Introduction to Xyloentomology). B5判ハードカバー. 496 pp. 九州大学出版会.

構想から15年余を経て, 岩田さんのライフワークである「木質昆虫学序説」が上梓された。この本のことは, 昆虫関係の会合の折に著者よりたびたび聞かされていたし, その出版を心待ちにしていた方々も少なくないだろう。私もその一人であるが, 版元から届いた封書を開いて, まず美しい装丁に胸がときめき, 手に取ってその分厚さに圧倒された。祝福の気持ちとともに多少の妬みも感じたから, 少なくとも第一印象は強烈である。

タイトルにある木質昆虫学 Xyloentomology は著者の発案である。その著者の言葉を引くと, 「木材保存(家屋害虫), 森林保護(林業害虫), 森林生態(有機物分解者)などの研究成果を統合し, そこに昆虫の利用という面を模索する新しい分野」と定義している。諸学の垣根を取り払い, 木と虫の関係から改めて世界を見つめ直す本書を一言で表すには, 実に座りのよい造語であると思う。

本書は第I~V部から構成され, 各部の見出しを列挙すれば次の通りとなる。「第I部 木質昆虫学の基礎」「第II部 木質と昆虫の関わり」「第III部 木質昆虫学における他の生物の関連」「第IV部

木質昆虫学の展開」「第V部 木質昆虫学の未来」。巻末の引用文献は93ページにも及び, 内容の信頼性を高く担保している。実はこれこそが岩田さんの真骨頂であり, 本書の大きな特徴といってもよい。著者はそもそも比類ない文献収集家であり, それを背景にした先行研究のレビューの経歴が高く評価されてきた人である。その才覚は, 本書の豊かな情報と原典に忠実で無駄のない記述に如何なく発揮されている。私が専門とするカミキリムシに関することだけでも, 目から鱗が落ちるような啓蒙を受けた記述が幾つもあった。本書は, 材食性昆虫のみならず植食性昆虫を扱う研究者にとって, 必携のハンドブックであることはまず間違いない。これは決してお世辞などではなく, 率直な感想である。

第V章の中ほどに, 「本書には, やや擬人的な表現を用いている箇所があるが, これはあくまで理解の一助として...」という言い訳のような記述があり, 思わず微笑んでしまった。本書を読み進

むと, たしかにこの擬人的表現が随所に散見され, 「おや?」と思うことがある。岩田さんは私などと違ってとてもまじめな人だから, 冗談を滅多に口にはしない。そんな人がいう軽いおふざけは, 今流に言えば「ちょっと痛いかな」と思うが, それがあくまでも岩田流であるところが悪くない。

(新里達也)

